

伊勢路・黙契の旅の柳田国男

小田 富英

一 一身田の太田玉茗を訪ねる

田山花袋の『東京の三十年』に次のような一節がある。

「で十日ほどいて、福江から汽船で知多半島の亀崎に渡り、それから汽車で、〇君を伊勢の一身田に訪ねた。丁度十五夜で、柳田君と〇君と三人で町のある旅館に飲んだが、柳田君が靴の紐を結ぶことも出来ないほどに酔って、頻りにハイネの詩を朗吟したことを覚えてゐる。其処から柳田君は奈良に向い、私は〇君にわかれて、東海道のかえりの汽車賃だけで、名古屋から木曾へと木賃旅行をした。」^①

「で十日ほどいて」というのは、明治三一年の夏、柳田国男、当時松岡国男が滞在した伊良湖岬を花袋が訪れた時のことをいふ、「〇君」とは、太田玉茗のことである。玉茗とは、花袋と国男の共通の文学仲間で、

前年出した合同詩集『抒情詩』^②の共同執筆者である。

玉茗は、『抒情詩』刊行後の明治三〇年一〇月、三重県一身田にある真宗高田派本山専修寺の真宗勸学院の中学校の英語教員として赴任した。詩人としてこれからという時に、單身遠地に赴任した玉茗は、淋しさを伝える書簡を花袋に送っている。花袋は、それに応えるように、翌年の二月、一身田の玉茗を訪ね、二人で月ヶ瀬に遊んだ。玉茗と別れたあと、花袋は、和歌山から神戸に立ち寄り、神戸新聞に勤めたばかりの江見水蔭^③を訪たという。国男と花袋が、伊良湖から一身田を訪ねたのが、その半年後のことであつた。

この流れを、私は「柳田国男年譜」^④では、次のように記した。

「明治三一年九月二日 前の日、船中で書いた花袋宛ての手紙を出す。そ

の後、一身田の太田玉茗を訪ね、奈良から大阪に出て、辻川に二度目の帰郷をする。玉島、多度津を経て大阪から船で帰京する。その途中、『神戸新聞』の社会部長だつた江見水蔭に会う。」

なぜ、花袋と共に一身田に立ち寄つたと書かなかつたという、「船中で書いた花袋宛ての手紙」について花袋が紀行文「伊良湖半島」^⑤に記してゐて辻褄が合わなかつたからであつた。伊良湖から帰つた花袋に手紙を出したことを採用したのだったが、一緒に行動してゐた花袋に対して手紙を書いたとしてもおかしくはない。それも花袋の脚色であつたと考えればなおさらである。この書簡は、現存してゐないので花袋の創作とも考えられる。ということ、本文「注」にある先行研究を考慮して、この日の条を、以下に書き直すべきと考えるに至つた。

「明治三十一年九月二日 前の日、船中で書いた花袋への手紙を花袋の留守宅宛てに出す。その後、一身田の太田玉茗を花袋と共に訪ね、旅館で三人で酒を酌み交わし、ハイネの詩を吟ずる。」

花袋と玉茗と別れた後の行程は、「年譜」と交わらないが、江見水蔭と会うというのも、花袋の旅の後追いのようで興味深い。柳田と田山の付き合いは、お互いの旅の行程を共有し合うという暗黙の信頼に裏づけられている。文学観の違いや、小説ネタによる感情のもつれなどを越えて、お互いを成長途上の通過点とみる「默契」の友情関係と云っていい。

二 高見峠を越える旅で得たこと

大正三年、貴族院書記官長の要職に就いた柳田は、『郷土研究』の編集所を内幸町の官舎に移し、仕事の合間、論文執筆と編集作業に没頭することになる。

大正四年には、天皇即位式の大礼使として京都、続く大正五年には、橿原神宮への行幸の先着要員として奈良を訪れるなど、多忙となるが、郷土研究への目は衰えるこ

となく冴え続けている。そのことがわかるのが、伊勢路での次の体験である。

大正五年五月の『郷土研究』第四巻第二号に発表した「高見山近傍の口碑」⁸は、橿原神宮からの帰路、大和郡山から千早、五條と回って、高見山を越えたときの聞き書きである。

冒頭、柳田は、次のように始めている。

「大正五年四月七日、大和と伊勢との堺なる高見峠を越ゆる際、荷持ちの男より左の話を聞いた。此者は吉野郡小川村大字木津川の生まれで、二十年ほど前から同村大字鷺家口に出て住んで居る桶屋にして、此頃は人力車夫を兼業する四十余の至つて実体さうな男である。」

鷺家口に住むというこの男との話のなかで、狼の話がでなかったのかというの興味も湧くが、ここでは触れないでおく。柳田が筆記したこの男の話は、「杉谷」や「めづらし峠」の地名が、奈良春日と伊勢大神宮の水と領地争いが、「舟は舟戸、水はすぎた」で決着がついたといった由来話などであった。柳田は、まとめた後の「再記」として、「此話は出来るだけ桶屋の話した

通りに、最も新しい記憶によつて書いて見た。恐くは一度も文字ある者の口又は耳を通過しなかつた古伝であらう」と書いている。

前述の拙稿「柳田国男年譜」では、この日三重から官舎に帰つてすぐに書いた柳田の様子を次のように書くことができた。

「大正五年四月七日 五条から伊勢街道を人力車で鷺家口、杉谷と通り、高見山の麓に出て、奈良県と三重県の県境の高見峠を越える。荷物持ちの男から高見山にまつわる伝説を聞く。波瀬村から松坂に向かう。途中の宮前村赤桶礫石の風習についての話を聞き、のちに「赤子塚の話」に載せる。帰宅後すぐ、「高見山近傍の口碑」を書く。」

文字を通さない、口から耳への「古伝」の危機に直面していたはずの柳田が、四十代の「実体さうな男」の話に魅力を感じたのは必然であつたろう。

この後、柳田が二度、三度と「古伝」を集める努力をしたのも、この時の充実感があつたと思われる。昭和に入つて、柳田は、『人情地理』⁹という雑誌を使い、全国からそうした「口伝」を集めようと試みている。

同誌の創刊号には、「柳田国男先生選」「耳で聞いた話」を募る」の呼びかけが載り、数十通もの応募があったものの、柳田の意図するところではなく、再度、三月号で柳田の「我々の求むるもの」⁽¹⁰⁾と題した次のような文を掲載せざるを得なかった企画である。

『耳で聞いた話』の新しい計画は言語写生の興味を流行させたいといふに在つたのです。子供でも老女でも又は路傍の人々でも、最も単純な者の話した通りを、聴いて感じたままに書き現はす技術を、読者諸君の間に競争していただくと思つたのです。勿論それに関連してスケッチをする者の感想なり批評なりを、書き添へられることは自由ですが、少なくとも主要部は自分で無い者の、実際話したことで無ければならぬのであつて、其点が『口でいふ話』や『筆で書く話』とは別でなければなりません。』

柳田は、その後、呼びかけが徹底していなかった為に、数十人の応募者の方に「無駄な骨折り」をさせたと詫び、具体的な例を三つ述べている。

「一、或農夫の茶飲み話。二、祖父が私に聴かせてくれた話。三、汽車で隣席の人がしゃべつて居た話。」

さらに続けて、次のように要求している。

「伝説は如何にも面白いものに相違ありませんが、それは土地の人の片言隻句の中に、ふと引用せられた場合に趣味があるので、是を長々と小説見たやうに書いてもらつては、もう全く別なものになり、読みにくい迷惑なものになつてしまふのです。」

「聴いて感じたまま」とは、『遠野物語』の柳田の手法だが、ここにきて、もう一度、高見山で出会つた「土地の人の片言隻句」を思い出し、「高見山近傍の口碑」のような「口碑」を求めたに違いない。

三『故郷七十年』の約束の旅

花袋の『東京の三十年』は、「東京に三十年住んでいた一文学者の追憶記」であつたが、柳田の『故郷七十年』は、一二歳で故郷辻川を出てから七十年の柳田の回想記である。この回想記の実現に近づく出来事が、次のような伊勢路の旅にあつた。

昭和二四年五月二六日、柳田は、長谷川

如是閑と朝日新聞社主催の文化講座講師として、関西方面の旅に出た。同行したのが、当時、朝日新聞社出版局長だった嘉治隆一であつた。この時の思い出を嘉治は次のように書いている。

「二十四年にもやはり五、六月の交に、朝日新聞出版局の古典講座紹介講演会のために、伊勢路、大和路の旅をなさいました。(略)たしか伊勢松坂の宿に泊つた翌朝の食卓での話だつたやうに憶えて居ります。柳田翁から、

「君とは共通の知人、共通の話題が大分沢山あるやうだから、一度緩り僕の方までの経験話を聞いておいて貰ほうかね」といふやうなお話が出ました。

「そのうち是非お願いいたします」とお答へしておきました。その後九年経つて、この約束が実現したのが、「故郷七十年」でした。⁽¹²⁾

つまり、柳田の方から、「僕の今までの経験話」を聞いてもらいたいと話がでたというのである。この伊勢路から大和路の九日間⁽¹³⁾に及ぶ旅は、柳田にとって思い出多い旅となり、多くの人と語り合い、京都に行く予定を止めるほどであつた。そんな旅

になることを予感しての提案であつたのだらう。

この話が実現するのが、嘉治が神戸新聞に移り、神戸新聞六〇周年記念事業として提案してきたことによる。

八年後の昭和三二年一月一四日、嘉治隆一は、神戸新聞社の記者宮崎修二郎らを連れて柳田家を訪問し、回想記の聞き書きが始まることになる。録音機を回し、原稿起こし、入稿、校正のサイクルが⁽¹⁴⁾始まったのが一七日から翌年の三月二九日までの二五回、同席した鎌田久子は、その時の様子を次のように伝えている。

「多い日は五時間、少なくとも三時間、播州を軸とした先生のお話は、嘉治氏というこの上ない恵まれた聴き手を得て、「語り」の真髄を発揮された。氏の巧みな誘い水に導き出されて、六十年前、七十年の昔にかえられた先生は、いつも最後には、どうも今日は私一人で喋りすぎると言いわけいた⁽¹⁵⁾挨拶をされたものである。」

柳田は、『神戸新聞』に「故郷七十年」の連載を始めるにあたっての「起筆の言葉」

で、次のように述べている。

「神戸新聞は今年満六十年を迎えるという話である。人間でいえば還暦というわけであろう。ところが初めて私が生れ故郷の播州を出て関東に移ったのは、それより十年以上も古い昔のことであつた。それから私の心身がだんだん育つて行くにつれ、私の眼が全国的に拡がり、世界中のことに關心を引かれるようになったことに不思議は

ない。しかしそれでも幼い日の私と、その私をめぐる周囲の動きとは八十余歳の今もなおまざまざと記憶に留まつて消えることはない。いつかそのころに筆を起し私自身の足跡とその背景とを記録するならば、或いは同時代の人たちにも、またもつと若い世代の人たちにも、何か為になるのではないかというのが、かねてから私の宿志であった。」

故鄉十年

柳田 泉

故郷を離れたころ

[illegible]

草と塩になつており、石垣は築いてあつたが、上の方は芝生、草も生えてしまつたに似てゐる。

(内ヶ島海軍駐屯地)

(カッとは柳田氏筆)

昭和33年1月9日 木曜日 県民版 13版 (6)

『神戸新聞』昭和33年1月9日

柳田が松坂の宿で語った「宿志」と、それに応えた嘉治の人間力によって、『故郷七十年』が世に出たわけで、これも伊勢路の「默契の旅」として私たちは感謝しなくてはならない。

四『山宮考』検証の旅

長谷川如是閑、嘉治隆一との関西旅行から気分良く帰った柳田は、次の年にも伊勢を訪れることになる。この時は、折口信夫と一緒に、岡野弘彦が同行した。

拙稿「年譜」は、この時の様子を次のように伝えたが、根拠は岡野弘彦⁽¹⁶⁾と水木直箭⁽¹⁷⁾の文章による。

「昭和二五年一〇月二四日 折口信夫と共に関西旅行に出発する。岡野弘彦が同行する。東京駅で、妻孝と堀一郎、伊馬春部、岩本徳一らに見送られ、朝九時発の「つばめ」に乗り、東京駅を出発する。名古屋で下り、来田親明神宮文化課長の出迎えを受け、近鉄に乗り換え、宇治の酢久旅館に泊まる。

一〇月二五日 内宮に参拝し、古殿池の心の御柱の跡を見たいと申し出るが、わからないと言われ不満に思う。

夜、神宮の職員二、三十人と座談会をもつ。自分の両親は、伊勢参りをしたいと願っていたが、それを果たせずに死んでしまった。こういう人がいるというのを、これからの神道は考えていかなければならないと述べ、信仰と学問について語る。座談会も終わるころ、杉谷欄宜から、宝貝を蒐集しているとき、自宅に行き、コレクションを見せてもらう。宿に帰ると、岡野の父親が来ていて、代々仕えているという神社の話聞く。

一〇月二六日 伊勢在住の郷土研究家大西源一の案内で、外宮を参拝したあと、城田村荒木田氏の山宮や田丸町田辺の氏神を回る。神宮司庁文化課主催の文化講演会で、全国から集まった神職など約四百人が聴講するなかで「日本民俗学の現状」を講演する。少宮司の秋岡保治が国学院で折口の同級であったことから、この講演が実現した。折口は、山田高校と市の公会堂で講演する。

一〇月二七日 内宮の奥の剣峠を越えた時、眼下に広がる五ヶ所湾を見下

ろして神宮の御神霊が五十鈴の川上に鎮座した理由に気づき興奮し、岡野に写真に収めるように指示する。

一〇月二八日 志摩郡御座村琴平山の麓の海岸を歩き、近鉄宇治山田駅から大和に入る。橿原神宮を参拝し、折口と近世の国学者の話が弾み、岩崎美隆の歌を口ずさむ。この日は、当麻寺の中ノ坊に泊まり、松村実照住職の歓待を受ける。夜、朝日新聞の記者の取材を受ける。」

岡野の詳細にわたる思い出から、この旅の目的を私たちは知ることができる。岡野は言う。最初に書いた『折口信夫の晩年』を出してから何年も経ち、折口の年を越え、柳田の年に近づいて、やっと「身にしむような思いで回想」することができたと次のエピソードを披露している。柳田が、強い関心を抱いたのが「心の御柱」のことで、案内役に質問したところ、「私もよく存じません」との返答に怒りをあらわにしたというのである。

次の日、案内役が代わり、柳田を古くから知る大西源一⁽¹⁸⁾が務めたというから、大西であったにちがいない。大西源一とは、

かつて柳田の『郷土研究』に投稿したこともある郷土研究家であった。葉売りをしながら全国の郷土史を調べ、この時は、伊勢神宮の神宮司庁で『大神宮史』編纂に携わっていたというから柳田の前日の怒りもおさまったであろう。柳田にとっては、それだけでなく、柳田が昭和二二年に出したばかりの『山宮考』で展開した持論の先行研究を発表していた人物であつたのも幸いしていた。

ここで、柳田の持論について少し触れたい。柳田は、日本の敗戦が色濃くなると、もう一度神道について考え直すかのように、蔵書のなかから、神道関係の書を読み返している。このことから、柳田は敗戦をいつ頃知ったのかも推測できるが、このことは別の機会に回すこととする。そして、敗戦後、『喜談日録』で語った「今後の御役に立」とうと思う仕事のひとつに「国民の固有信仰」があると次のように述べている。

「遠い昔から有つたにちがひ無いもの、是が今までどういふ風に、引きゆがめられて居たかといふ点に心づくこと、勿論たしかな証拠が無いと、うつ

かりしたことは言へないので、辛苦して今材料を集めて見ようとして居る」
こうして集めた「材料」から、『新国学談』の三部作が次々に発表された。柳田の本心は、日本の固有信仰のもとを尋ねるためには、数十、数百巻をまとめてみなければならぬということにあつた。しかし、「現実には多分二三巻を以て終わるであらう」と述べた通りになつたのである。『山宮考』はその「第二冊」目、刊行は昭和二二年六月である柳田は、同書の冒頭に「解説」頁を設け、「山宮考」について次のように述べている。

「山を靈魂の憩ひ処とする考へ方が、大昔以来、今もなほ日本の固有信仰の最も理解しにくい特徴となつて、伝はつて居るのではあるまいかといふことを、説いて見ようとした新らしい試みの一つである。(略) 読者に念頭に置いてもらひたい一事は、我邦の沿海地帯が広くなり、文化の中心が世と共に平野に移つて来たことである。山を背後に持たない都邑と生産場が多くなれば、古い信仰は元の解釈を保つことが六つかしい。しかもこの地貌変化は、

陸地の隆起であれ、海の遠浅の囲ひ込みであれ、大体は皆近代の三四百年間に出現したものばかりであつて、その結果は山の麓の古い村々は却つて偏鄙となり、且つ自分たちの生活振りを旧弊と思ふやうになつた。つまり古い世の姿は省みられなくなつて居るのである。民俗学の方法の特に役に立つのは、この固有信仰の方面かと思ふ。是より以外には今のところ、之を尋ねて行く途は無いからである。」

この『山宮考』をして、民俗学と考古学との接点を早くに見抜いたのは、谷川健一であつたが、このことも別の機会に回すこととする。さらにこの『山宮考』は、『先祖の話』の続編となることを柳田自らが語っていることも忘れてはならない。柳田は、同書に「先祖の話」の項を設けて、最後を「実は自分は「先祖の話」を書き上げた頃には、まだ長命して第二第三の書が、著はし得られるといふ自信をもたなかつた」とまで明言しているのだ。

短期間で書き上げた『山宮考』には、何かが足りなかった。それは、文献資料からの仮説はあるが、柳田らしい旅での検証が

乏しかったことだろう。『山宮考』のなかにも、今まで訪れた村々の氏神様の祭や墓所の話が出て、肝心な「山宮祭場」の話になると文献資料に頼ることが多いように見受けられる。柳田自身も知リたかったのかもしれない。

昭和二四年四月には、渋谷敬三らと富士浅間神社を見学し、もともとの斎場が、奥の院の山の上の小祠であったことを知った。続けての荒木田、度会家の「斎場」と「墳墓」探しの伊勢の旅である。『山宮考』の検証の旅であったことは間違いない。

大西源一の話に戻そう。大西源一は、柳田が『山宮考』で論じた山宮祭場と墳墓との関連を早くに発表した郷土研究家であった。すでに、大正七年には、「荒木田氏の氏社及山宮祭場」を『國學院雑誌』に発表していたこともあり、話が弾んだに違いない。成城大学の柳田文庫には、昭和三年の大西の著『参宮の今昔』⁽²²⁾があり、その後晩年まで交流が続いたことがわかる。

もうひとつ岡野の思い出のなかの興味深いエピソードが、「年譜」の一〇月二七日の条にある。岡野の文章から柳田の興奮を再現してみよう。

「五十鈴川の源流を遡り、剣峠を越え五ヶ所に出て元伊勢といわれている伊雑宮に参拝した時にも、剣峠の頂上の切り通しから五ヶ所湾の青いかがやきを遙かに見おろして深い感動を示された。

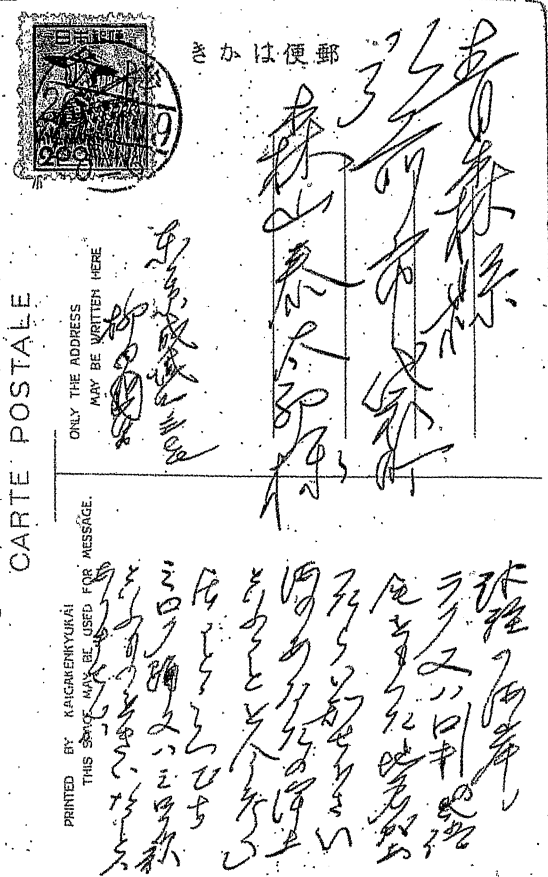
『岡野君、これだよ。伊勢の御神霊が五十鈴川の川上に鎮まられたのは、熊野から志摩・伊勢につづくこの海を後に負っているからだ。このところを、よく写真に撮っておきなさい。』同じ景色を見ても、折口は、海を前にして「ニライカライ」を想像し、柳田は、海を後ろにした山の「祭場と墳墓」を夢想したのだ。

『先祖の話』に注目が集まるなか、いま少し『山宮考』への言及が増えてもいいし、私もこれからも、折口と柳田の伊勢路の旅の重要さを強調していきたいと思う。

柳田はこの頃、弘前に住む森山泰太郎を応援するために何度となく葉書を送っている。そのなかの一枚が、この旅の翌年、昭和二六年十一月一日付け絵葉書である。裏の写真説明には活字で、「志摩郡御座村琴比羅山頂ヨリ太平洋を望ム」とある。そ

の葉書文面の末尾に「昨十月二十八日此海岸をあるいてみました」とあり、この興奮の次の日のこととわかる。文面から、「海の浄土」を地名から探ろうとする柳田の意図があるもので、ここに紹介したい。

本論のタイトルに「默契の旅」と入れたのは、伊勢路が柳田を中心とした「默契」の関係の舞台であったことと強調しなかったことにある。昭和六年の神宮皇学館での夏期講習会などの旅について触れずに終わったが、「伊勢の土地が民俗学の進歩に大きく寄与している」という柳田の言葉を最後の締めとしたい。



- 注
- (1) 田山花袋『東京の三十年』『私と旅』（大正六年六月、博文館刊）
 - (2) 太田玉茗（一八七一—一九二七）詩人、羽生建福寺住職。妹里さが花袋と結婚。独歩と国男が、婚姻届の証人になる。
 - (3) 宮崎八百吉編『抒情詩』明治三〇年四月、民友社刊。国木田独歩、松岡国男、田山花袋、太田玉茗、矢崎嵯峨之舎、宮崎湖処子の合同詩集。挿絵和田英作。
 - (4) 『花袋周辺作家の書簡集二』（田山花袋記念館研究叢書第三卷、館林市）
 - (5) 江見水蔭（一八六九—一九三四）詩人、小説家。個人雑誌『小桜織』で無名時代の花袋の小説を発表する。

津軽の海岸にラク又ハロキの語尾をもつた地名があつたら御知らせ下さい 海のあなたの浄土といふことを今考へて居るところです ミロク踊又ハミロク歌といふものをきいたことはありませんか 御心入の林檎がやつと届きました 御親切感謝します 雪ハことしハ如何 御読書の状況御報被下度 又御逢の折ハ竹内夫人によろしく 十七日夕 柳叟 昨十月二十八日ニ此海岸をあるいて見ました

- (6) 「年譜」(『柳田國男全集』別巻一)
- (7) 田山花袋「伊良湖半島」(『南船北馬』明治三二年) この時の二人の行動については、葉山茂生「柳田國男と伊良湖」(『三河民俗』第三号、一九九二年五月) や小島環禮「柳田國男の『伊勢の海』から百年」(『比較民俗学会報』第二三巻第三号、二〇〇二年一〇月) などで論じられているが、花袋の「旅と私」と「伊良湖半島」の矛盾を解決する決定的な根拠はない。ここでは、二人が共に一身田を訪ねたことの意味に重きを置いた。
- (8) 「高見山近傍の口碑」(『柳田國男全集』第二五巻)
- (9) 「人情地理」昭和八年一月、武俠社から創刊された「人情風俗の雑誌」。柳田は、「常民婚姻資料」を第二号から第五号の終刊号まで連載した。
- (10) 「我々の求むるもの」(『柳田國男全集』第二九巻)。同巻の拙稿解題も参照されたい。
- (11) 「東京の三十年」初版函裏の広告文
- (12) 嘉治隆一「故郷七十年」の成り立ち」(『定本柳田國男集』別巻三月報、昭和三九年九月)。同様の思い出は、「老神童」(『心』第一五巻第一〇号、昭和三七一年一〇月) にも書かれている。
- (13) 昭和二四年五月二六日から六日三日までの関西旅行。この旅行では、宮本常一、水木直箭、新村出、岸田定雄、河合卯之助、入江泰吉、上司海雲らと語り合い、入江の撮った写真は、『新潮日本文学アルバム 柳田國男』に掲載されている。水木直箭「随筆折口信夫」(昭和四八年一二月、角川書店) の「柳田國男」の項に詳しい。
- (14) 神戸新聞記者であった宮崎修二郎氏から、柳田朱入りの校正原稿を一部いただいた私は、その過程について「柳田國男新年譜作成作業と『故郷七十年』一年譜新事項と『故郷七十年』校正原稿資料」(『伊那民俗研究』第二三号、二〇一四年五月、伊那民俗学研究所刊) として発表した。同号の飯澤文夫氏による「柳田國男『故郷七十年』のテキストとしての問題」と合わせて参照されたい。
- (15) 鎌田久子「故郷七十年」について」(『故郷七十年』昭和四九年三月、朝日新聞社刊)
- (16) 岡野弘彦「折口信夫の晩年」(昭和四四年、中央公論社刊)。「さわやかな怒り」(『定本柳田國男集』第三巻月報、昭和三九年二月)。「伊勢・大和の旅」(『柳田國男全集』第一六巻月報、平成一一年一月)
- (17) 水木直箭「柳田先生と大和と」(『近畿民俗』第三一・三二号、昭和三七一年一二月、近畿民俗学会編)
- (18) 前掲「近畿民俗」の倉田正邦「柳田先生と伊勢」によると、柳田と大西の交流は、明治三九年三重県郷土会発足当初からであることがわかり、倉田は「大西先生は三重県内では一番柳田先生と古くから交友があった」と述べている。
- (19) 「喜談日録」(『展望』創刊号、昭和二年一月、筑摩書房)。「柳田國男全集」第三一巻収録。唐木順三、古田晁に編集を任された白井吉見が、柳田に原稿依頼をし、破格な扱いで、四回の連載原稿を掲載した経緯については、同巻の拙稿解題を参照されたい。また、和田芳恵の「筑摩書房の三十年」(平成二三年三月、筑摩書房刊)は、同誌創刊前後の動きに詳しい。三部作とは以下のもの。「新国学談 第一冊 祭日考」(昭和二年二月、小山書店刊)、「新国学談 第二冊 山宮考」(昭和二年六月、同刊)、「新国学談 第三冊 氏神と氏子」(昭和二年十一月、同刊)。短期間で次々と出したが、とくに「山宮考」は、敗戦前から考え始め、年明けの一月一六日に書き終えている。「柳田國男全集」第一六巻の宮田登による解題に詳しい。
- (21) 「新国学談 第一冊 祭日考」「解説」(『柳田國男全集』第一六巻)
- (22) 大西源一「神宮教養叢書3 参宮の今昔」(昭和三年、神宮司庁教導部刊)。書き込みの有無については未見。
- (本誌編集長・『柳田國男全集』編集委員)



伊勢路にて，昭和25,10,27日，右 柳田先生，
中大西源一博士 左 折口信夫博士(倉田正邦写)